

〔書評〕

平野芳信著 『村上春樹——人と文学』

石原千秋

勉誠出版の「日本の作家100人」シリーズの一冊である。私の記憶がまちがっていないければ、このシリーズが告知されたとき、存命の作家は入っていないはずである。このところの『1Q84』の大ヒットと、「もしかしたらノーベル文学賞を取るかも」的な村上春樹ブームに乗って、後からつけ加えられた一冊だったと思う。しかし、存命の作家で「人と文学」は難しい。執筆者の人選には苦労しただろうが、平野芳信氏を選んだことはまちがっていないかった。そう思わせる一冊だ。

私が学生だった三〇年以上前には「作家研究は戸籍を取るところからはじめよ」などともんでもないことが言われていたが、いまはそんな時代ではない。ましてや、ある時期以降の村上春樹は、自己に関する情報をかなり規制する作家として知られている。本書の記述もできる限り出典を明らかにしており、細心の注意を払っていることがわかる。それでも、公開された情報はほほすべてに目を通していると確信できる記述の密度だ。さらに、著者の平野芳信氏はかなり入念な調査を行ったと聞いている。書いたことより書かなかったことの方がはるかに多かったのではないだろうか。いま私は「書かなかった」と書き、「書けなかつた」とは書かなかった。この両

者には天と地ほどの開きがある。前者は村上春樹へのリスパクトが前提となっているからである。

このシリーズは「人と文学」がどれもバランスよくコンパクトにまとめられており、やや不案内な作家について基本的に正確な知識を得るために非常に便利な作りになっている。本書もその点の役割を十二分に發揮しているが、それはまた執筆上の制約でもある。この制約の中で、実は平野芳信氏はかなり大胆なことを行っている。それは、村上春樹論としてはこれまで大きく取り上げられてこなかった芥川賞落選問題をクローズアップしたことだ。村上春樹は二回芥川賞の候補になって、結局受賞しなかった。村上春樹自身、このことに触れてこなかったわけではない。しかし、それは「僕は気にしていませんよ」というエクスキューズのような文章だった。

ところが平野芳信氏は、本書の三八ページから七四ページまで、村上春樹における芥川賞落選の傷の深さをさまざまなレベルで執拗に追いかける。それは、村上春樹が芥川賞の候補作となった『風の歌を聴け』と『1973年のピンボール』を後年、高く評価しなくなったこととか、芥川賞落選について書いた「芥川賞について覚えていくいくつかの事柄」というエッセイをそのエッセイのシリーズ

を収めた単行本に収録しなかったといったわかりやすいレベルから、二度目の候補となって落選した時期に書いていた『街と、その不確かな壁』という作品を、村上春樹自身が『街とその不確かな壁』と「」を抜かして誤記し続けていることをフロイトの「錯誤行為」(ちよっとした「しくじり行為」)にその人の本心が出てしまうこと)にぞぞらえて、そこに村上春樹の無意識の傷を読みとると言うアクロパティックなレベルにまで及ぶ。

平野芳信氏がなぜこれほどまでに芥川賞落選問題に拘るのかといえ、この問題がなければ村上春樹の数年にわたる日本脱出はなく、その後に書かれて一〇〇万部を超えるベストセラーになった『ノルウェイの森』もなかったという見立てがあったからだろう。その意味で、公にされた情報で使えるものはすべて使って、別の観点から見れば、公にされた情報だけからこれだけの推理(この本が「実証」が不可能な地点から書かれていることを改めて確認しておく)を行った手腕はみごとと言うほかない。

村上春樹が二〇〇九年に行ったエルサレム賞の受賞スピーチで、それまで親子関係の悪さからかほとんと言及しなかった父親について言及したことが話題となったが、この問題でも平野芳信氏の推理は秀抜だ。村上春樹は一九九一年から二年半にわたってアメリカのプリンストン大学に滞在した。その時書いた「ねじまき鳥クロニクル」がノモンハン事件に取材したことや、後に村上春樹自身が「データチメントからコミットメントへ」という趣旨の発言をしたことなどから、この時期に村上春樹に作家としての「転回」があったとよく言われている。それまで社会に背を向けていた村上春樹が、社会と向き合うようになったというのである。その理由を平野芳信氏

は、村上春樹がプリンストン大学で講義を行って給料を得たことに求めるのだ。そこに、村上春樹転回の理由を見るのである。それはいったいどういうことだろうか。「一時的にしろ、春樹が両親と同じ職業を選んだということになる」(傍点原文)というわけだ。一時的であれ、父親と同じ「教師」になったことに村上春樹の「転回」の理由を求めることなど、いったい誰に発想できただろうか。

ところが、国際的な賞をいくつも受賞した村上春樹について、平野芳信氏のスタンスは微妙である。

しかし、筆者はここ数年の一連の動きに、いささかの危惧を覚える一人である。「春樹は知らず知らず「裸の王様」になりはじめているのではなからうかと。(一一〇ページ)

ユーチューブで昨年のバロセロナ賞のスピーチを二度見たが、論理的な破綻も多く、ハラハラした。本書で村上春樹の父親の名前が私と同じ「千秋」だとはじめてきちんと意識したうかつな読者である私も、こうした熱心な研究者の「危惧」の念が村上春樹に届けばいいと思う。

本書の後半は「作品鑑賞」。特に「1Q84」の梗概が非常に長く、「鑑賞」もレベルが高い。言いたいことがたくさんあって、もどかしいような楽しいような気持ちで書いたのだろうなあと、想像しながら読んだ。

ところで、この書評を書いているときにちょうど平野芳信氏の最初の村上春樹論である『村上春樹と《最初の夫の死ぬ物語》』が「新装版」で刊行された。初版もシャープな装幀でよかったが、今度は

ぐっとおしやれな装幀で、版元の翰林書房のやる気を感じさせる。と言うより、この本が翰林書房の名をあげることになるだろう。この本には二つのポイントがある。一つは『風の歌を聴け』の物語上の謎をほぼ完全に解いてしまったことである。このブライオリティーは平野芳信氏にある。もう一つは、芸術作品の「構造（話型）」がある時代や社会の無意識を反映しているという確信から、村上春樹や夏目漱石やあだち充のマンガ『タッチ』や岩井俊二監督の映画『ラブレター』といった思わぬ作品を組み合わせて、時代を超えて「反復」される「気分」の構造を炙り出しにしたことである。知的な刺激を存分に味わえる好著である。

これで平野芳信氏は「評伝」と小説読解と二つの武器を手にしたことになる。この二つがさらにどんな村上春樹研究を生み出すのか、村上春樹の小説を論じた本を一冊書いた私はとても楽しみに、そしてちょっと恐れながら見守ることになりそうだ。

（勉誠出版、二〇一一年三月刊行）

（いしはら・ちあき）